

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

かにかくに物は思はじ飛驒人の打つ墨繩のただ一道に

(云々物者不念斐太人乃打墨繩之直一道) 万葉集卷十一 2648

小さいころに、「かにかくに」(云々) はどのような意味なのかを色々と考えました。高校卒業の三月一日の日に、第一回の同窓会が開かれました。その小さな料亭の十八歳前後の少年少女の集う会の席の「はし袋」の包み紙に又この歌が書かれていたのです。この歌は第三者の見ての感動なのでしょうか。

今、飛驒では我々のはっきりした先祖を知りたいとして、DNAの検査を、皆が協力して進めているのです。すると沖繩の最も古から住んでいる人々と全く一緒の「DNA」が検出されるのだそうです。まさにこれは縄文人なのです。仁徳天皇紀にこの飛驒へ悪人征伐の軍が八幡神を背にして侵攻し、両面スクナを打殺して「斐太人」を平定したと書かれているとされます。

日本原住民の子孫として「物者不念」を「ものはおもはず」と訓をして下さった先人の御苦勞を思うと共に「不念」の「念」は「思」といかに違うのかという言葉のころのありようを思う時に、ただ涙が出て又、酒を一口ということになってしまうのです。わたしには、この念は「いまにみている」という言葉のように思ってしまうのですが、一口お酒が多かったのかもしれない。しかしこの原住民のこころのつぶやきは、「はし袋」の心でもあるのです。

卷頭言

月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人也。舟の上
に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老をむかふる者は日々
旅にして旅を栖とす。と歲月も生涯も旅と観じた松尾芭蕉
は、古人も多く旅に死せるありとして、元禄二年弥生三月
も末の七日奥羽長途の行脚「奥の細道」の旅に出立します。
芭蕉は漂泊の詩人と云われます。旅の詩人です。旅の中に
自己の新しい俳諧すなわち文学を発見していったのです。尾
形伝によれば、「野ざらし紀行」「鹿島詣」「笈の小文」「更科
紀行」は俳壇の低迷を打破し、漢詩文調以後の新しい俳風
を開発するための芸術的営為にはかならなかったわけであ
り「崩壊した都市俳壇にかわって台頭してきた地方俳壇を歴
訪することによって、新風の伴侶としての新しい連衆との
出会いを求め、またひとつには、各地の歌枕を巡礼するこ
とによって、古人の詩心の伝統を探り、そこに新しい創造
への源泉を汲もうとした」のです。「奥の細道」の旅で「か
るみ」の志向と「不易流行」の理念を発見したといえます。
与謝野晶子は、鉄幹が常に新しい歌を詠んでいたと言っ
ています。歌詠む者は、言い換えれば文学を志すものは、いや、
あらゆる分野において、新しきを求め自己改革することにこそ
創作の意味がある事を認識したい。

(松岡)

太陽の舟 目次

三十二卷 三月号 (通卷三〇三号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

卷頭言

松岡 三夫 1

二十五首詠

よしだゆきお 2

阿部正路論 (第一〇一回)

須藤 宏明 4

歌誌散見 (第七十七回)

豊泉 豪 5

作品Ⅰ

工藤 和子 他 6

一月批評 (作品Ⅰ)

吉岡悠紀子 16

(作品Ⅱ)

三木 勝 17

合 評 (座談会)

18

選者十首

角田 順子・土方 澄江 20

秀歌拔芳 (三〇一号)

酒向 一次・渡辺 幸子 21

作品Ⅱ

三木 勝 他 26

作歌の目・作歌の技法 (第六十二回)

三木 勝 34

文法講座 (十五)

奥田 清 36

歌会・支部報告 他

37

編集後記

深谷 (幸)・山田 (紀)・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

秘めし琴線

よしだ ゆきお

裸にて小魚を捕る少年を櫛の葉蔭で君は見つめる

同級生机並べし仲なるに交る知らぬ思慕の赤糸

学芸会舞台の君の振袖におぼろな異性をわれは目覚むる

春の野にうさぎと戯る君の傍なに恥じらいしかわれは駈け去る

手をつなぎ鎮守の杜の石段を一気に駆けし秋の夕暮れ

君に借りしノート最後のわれの名が隙間もなしに書かれおりたり

学びの窓さくらの校庭いつも君われの心の真中に住めり

同窓会霧流れゆく灯の下で秘かに君はわれにささやく

恋文を友の多くのよせらるに想いの友は私に触れずと

和子連れし君と秘かに散歩せり村のはずれの林の道を

掌は熱く浪打つ鼓動に耐えきれず黙して別れ悔いを残せり
身動けば千丈の滝を墮つるなりそのことを識る吾も又君も
梅咲きて遅き賀状の手紙届く病床にてと乱れ文字哀し
簡潔な手紙に添えらる押し花にはつきりと識る君の琴線
灯火は嵐の夜も雪の夜も耐えてはるかに消ゆることなく
惜し惜しむ思慕の赤糸そのままに桜散る頃君旅立てり
幼な日の鼓動に咲きし梅の香をそつと渡して君は逝きたり
微笑みの面影にみる惜愛の秘めし琴線形見となれり
縁ありて来世もこの世に点るなら灯火乱れ山を焼くらん
吾愛し又愛されし幾十年純白のまま黄泉の彼方に
ふるさとを離れ星霜半世紀山河にきらり君の面影
不思議なり幼なき友の君逝きて故郷の山河他国に思えり
思慕の糸絡む術なき友なるに君重かりし故郷の山より
人影も途絶えて久しふるさとの山寂しかり谷淋しかり
ふるさとの幽谷に咲きし白梅を識るは吾のみ果無く散れり

阿部正路論

須藤 宏 明

―回復への過程―

心が安まるとは、どのような状態を言うのだろうか。〈癒やし〉という言葉が横行するようになって久しいが、癒やされるとは、果たして、優しさ、協調性の中で甘えるということとをのみ意味しているのだろうか。阿部正路の文学に接すると、それは全くの逆であり、心が安まるとは、厳しい状況の中であって、身を個として律することにあると知らされる。阿部は、文学の中に常に人間の心を見ている。

文学と人間の心の関係は、夏目漱石が、英国留学からの帰朝後の明治三十七年に『帝国文学』第10巻第1号に発表した論文「マクベスの幽霊に就いて」で説く〈超自然の文素〉という言葉がすべてを言い表している。漱石は、マクベスの舞台において、幽霊という存在を観客に見せるか否かという問題で、見せるべきだ、なぜなら、合理で割り切れない存在を示すのが芸術であり文学だからだと説き、そのような合理で割り切れない存在が、文学を支えるのであり、それを〈超自然の文素〉と称した。それを、自ら小説として扱ったのが『こころ』である。つまり、心こそが〈超自然の文素〉なのであ

る。阿部が、常に見ているのは、この心という〈超自然の文素〉なのである。

阿部は、「マクベスの幽霊に就て」に対して、「文学は科学にあらず」というのが、漱石の基本的な考えであることを強調する。『漱石邸幻想』創樹社・昭和六十年、三十頁）このことを踏まえて、阿部は、

漱石は、ロンドン塔で、〈過去といふ底なし穴〉を見る。ただ眺めたのではない。人間と人間をとりまく運命の底なしの穴をみつめたのだ。『漱石邸幻想』二十七頁）

と、漱石の姿とその奥底の思惟を見る。この時、漱石は一人である。漱石の英国留学での孤独と苦悩は周知のところである。この環境が、漱石に深い洞察を与えたことを、阿部は我々に教えてくれる。この孤独と苦悩が、阿部の文学の根幹にある、隠者の魅力は、この人間離脱にある。そして、隠者文学の魅力は、人間離脱を示しながら結局のところ、人間回復を、時代を超えた形においてなし得ている点にある。私はそこに、鋭く暗く、確かな、隠者の系譜を見る。『疎外者の文学』楓桜社・昭和四十六年、九頁）

という思想につながっているのである。阿部が、最終的に求めているのは、「人間離脱」というミザントロップ的な気取りや表面的な格好良さではなく、「人間回復」なのである。「離脱」は「回復」のための一過程であり、手段であり、「回復」を得るための環境である。「回復」という安心は、このような過程を経て得られるものであるというのが、阿部の思考である。

歌誌散見

第七十七回

豊泉

豪

「ふいめえる」①

同人誌「ふいめえる」は一九九〇年五月、茨城県在住の荒木富美子、井坂美智子、川村ハツエ、小泉桃代、筑波章子、福島美恵子、星田郁代により「女性七人誌」と銘うって創刊された。七人の所属を見ると、「茨城歌人」が多いものの、それ以外の結社はまちまちである。代表者等はとくに明記されず、巻頭言「発刊のことば」は川村が執筆している。これによれば、『現代短歌の十二人』（一九八四年、雁書館）をテキストとしてスタートした勉強会が発展し、「自然発生的に」生まれた同人誌ということになる。以降、ほぼ年二冊の割合で、二〇〇九年十一月に四〇号が発行されている。四〇号現在の同人九人を含め、この間に計十九人の女性歌人が参加し、常時七人以上、多いときで十一人が同人となっている。創刊号から継続して参加しているのは福島と星田の二人だけで、同人の入れ替わりの頻度は比較的高いと言えようが、それにも関わらず、二十年の長きにわたってコンスタントに発行を続けているのは、同人誌では珍しいことかもしれない。主張としてとくに〈女歌〉や〈フェミニズム〉が意識されているわけではないようだが、茨城県在住の女性という枠は創刊以来崩されていない。また、いわゆる「超結社」誌が長く続くと、

それ自体が結社誌化するケースが少なくないように思われるが、「ふいめえる」は、現在も基本的に他の所属結社を持つ人々の集まりのようである。さまざまな意味でユニークな歌誌であるが、だからといって、例えば「なぜ女性だけなのか」「どうして茨城県在住者限定なのか」などと、一つ一つに強いて意味付けをする必要はないのかもしれない。人と人との結びつきには、結果として〈縁〉というよりほかない力が働いているのだろう。ただ一つ例外なく言えることは、集団の継続には絶え間ない努力が必要であり、短歌の同人誌にあってみれば、その努力とは、短歌の創作や研究に対する真摯で謙虚な姿勢の持続に他ならない、ということである。

雑誌の大きさはB5判、ページ数は概ね三〇から四〇ページである。表紙も含め墨一色刷りの簡潔な体裁である。短歌作品と巻頭文は一段組みで、ほかは三段で組まれているが、いずれも余白が大きめに取られた、読みやすい誌面となっている。出詠は一人十八首で、エッセイと歌集評が各四、五編掲載されるほか、四〇号現在、合評「齋藤史歌集『風翻翻以後』を読む」（十回）と、福島正子「高橋正子の短歌」（十四回）が連載されている。齋藤史の作品合評は大野誠夫に続くものである。またこれまで、各同人がそれぞれのテーマにおいて新旧歌人の評論を連載してきている。スタート時から現在まで、一貫して評論、研究にも力が注がれている。なお、時々男性歌人からの寄稿も見られる。

一月批評（作品Ⅰ）

吉岡悠紀子

息子の婚約者木村純子嬢へ結婚前年の誕生日に贈る

・君こそは迎えし娘来春に純白まとうをこころ待ちぬる

北川 昭

名前折込短歌を私は始めて知りました。作者の造詣の深さに感心しました。ご子息のお嫁さんを迎えられる喜びが伝わって来ます。このような短歌で迎えられるお嫁さんはお幸せと思います。

・孤独とは異なるものと思ひしに孤高もやはり淋しいもんだな
君塚 一雄

プライドを持ちひとり超然としている孤高でもやはり淋しいという気持がよく分かります。語りかけ言葉の結句の新しさと共に作者のしみじみとした気持が伝わって来ます。

・「孤独とは友なり」と言いしムスタキにさもありなんと一人乾杯
高橋 和子

ムスタキはフランスのシンガーソングライター（エジプト出身）で「今宵は私は孤独と一緒だから寂しくない」と唄っているそうです。前出の君塚同人の孤独に関連して考えさせられました。短歌には背面にある人生のあり方まで考えさせる深さがあると思います。

・ガラス戸は秋空映し竹楽器清しき音色静かに流る

河野 静子

私は竹楽器を聴いたことがあります。この短歌を通して清しき音色、幽けし音色を聴いてみたくなりました。

・間引き菜をすすぐ真水に秋の陽の透きてゆれたり宙をうつして
末次 房江

仕事をしながら水に透ける秋の陽を感じられる作者の感性の豊かさに感心しました。感性を磨くにはどうしたらよいでしょうか。たとえ同じ物を見ても感じない自分を恥ずかしいと思いました。感性を磨いていきたい。

・時いたり音もなく散る木の葉ほどの覚悟が欲しと落葉道ふむ
玉川 愛子

作者のご立派な人生観の出ている短歌と思います。このような心に少しでも近付きたいと思いました。レオ・パスカリイ作の葉っぱのフレディの「冬が終り春が来た。木の梢に新しいのちが生まれた。」の一節を思い出します。新芽の出てくることを期待して散りたいと思います。

・奥田屋のなつかしき鶯のもみぢ葉のやや反り乾きひらり揺れたり
庄司 久恵

・行き行きて紅葉ふかまる飛驒の山に杉の穂先の直立の美
多久和玲子

・向う岸の小径踏み分け湯の宿の窓に手を振る友等のありて
富永 道子

三首とも紅葉の美しい飛驒吟行会の様子が楽しく伝わって来ます。岩魚の骨酒で乾杯され総勢三十三名で短歌の話に花が咲いたことと思います。

一月批評（作品Ⅱ）

山本 賀子

・山の端を転がるといふ月の影尾花はみたり飛驒の名月

二反田 實

飛驒吟行会で、中秋の名月が稜線を転がる転月の弥陀ヶ洞山を鑑賞、満月が皓々と転がる情趣を思い浮かべ、江戸時代から伝承された土地の方々の詩情に感動しつつお話を伺いました。故郷に籠める作者の愛情が、力強く伝わる一首です。

・病棟の氷雨に曇る夜半の窓マンシヨンの灯々星のまたたく

堀井 英範

マンシヨンの窓に点る灯々、病棟にある作者は懐しく恋しい家庭のぬくもりを「星のまたたく」ように眩しく見えています。付き添いや自身の長い入院で経験したことを思い、心打たれました。「入院生活」七首には作者の気力と優しさが結晶となり美しい詩境を表現されています。

・隠り居をかこちをりしが身近なる友に誘はれ小池にあそぶ

松本 啓子

誘われて気軽に応じられる作者の行動力がいかにも若々しく、思わず「あそぶ」に興味を惹かれます。続く歌群で、草花に対する造詣の深さに驚かされ、一首の世界の広がりが増加されます。一首の独立性ということも言われますが、連続してテーマに「あそぶ」が生き生きと語られていると思います。

・那智大社こんなに石段あったのか思い出せない若き日のこと
丸山孝一郎

旅の歌が多く健脚の作者でも「こんなに」と思われる、若い時には考えもなしに駆け上がったのか思い出せもしない。誰もがいつか出会う老いの感慨を明るく詠まれているところに一首の清々しさが感じられます。共感を喚ぶ作品です。

・国防色と夫言ふジャンパー取り込みて大日本国防婦人にあらず
村田 孝子

「国防色」は旧陸軍の軍服の色で、現在のカーキ色、「大日本国防婦人」会は国家総動員法（一九三八年）の一貫にあって戦時体制強化を目的としました。当時のマインドコントロールのすさまじさ。作者はその怖ろしさを知っている世代、二度と繰り返さぬという意志を「あらず」と強い一言で表現されています。当に歌は歴史の語り部となりましょう。

・深みゆく秋の高山駅前に人情あつき出迎へうける

山田 紀子

「太陽の舟」の全国大会や吟行会でいつも思うことは、細やかな人情溢れる地元の歓迎の温かさです。これはこの会の特筆すべき長所ではないでしょうか。定まりのことも歌に詠みたくなる風景を作者は感じられました。

・川魚皮から焼きて海は腹母の呪文の網に鯽おく

相羽 照代

久し振りにこの言葉を聞き忽ち母と立つ台所の匂いや皿の音に包まれました。母との会話の記憶は人生を温かくします。

合評

座談会

司会 今月は月号から四首を選んで合評を行います。一首目は、盛岡支部の熊谷香織会員の
 拝まるるたびに柄杓の水を浴び地蔵菩薩に秋の陽は入る
 です。どなたからでもどうぞ。

I この歌には上品なウィットがありますし、歌としての穏やかさもありません。特に結句の「秋の陽は入る」には、ほのぼのとした感じがあります。ただ、この作者としては一寸、柔らかすぎるかな、と思ったけどいづれにしても私は好きな歌です。

S 私は、上句と下句のつながりが一寸、おかしいのではないか、と思いました。「水を」の「を」を取って「柄杓の水浴びし」としたほうが良いと思いますね。

Y 私も同感です。作者は水を浴びているお地蔵様を静かに眺めながら、お地蔵様も大変だなあ、と面白おかしくそれでいて、さりげなく皮肉をこめて詠んでいる。面白い歌だと思いました。いつものしみにしている作者です。

S お地蔵さんは、いろいろな慈悲を表現するといわれていますが、こんなに水をかけられて辛抱強いなあ、と作者は思ったのでしょうか。

T そうですね。表現としては三句目の「を」を取り「浴び」は「浴ぶ」の連体形「浴ぶる」を使い「水浴ぶる地蔵菩薩」に直します。お地蔵さんは祈りの対象なので水までかけられ可哀相だ、更には人間の弱さや欲深さも見えてくる、と作者は思ったのでしょうか。結句の「秋の陽は入る」がとても良く効いています。作者は良く見ていると感心しました。

司会 では、次は水戸支部の込山千代会員の

草の種我が行く先を飛んで去る何の実ならん一瞬の間に
 です。如何でしょうか。

Y 土に近く生きていく人でないと、このような経験はできないだろうと思いました。それで、気になるところは、三句目の「去る」です。「去る」よりは「消ゆ」の方が良いのでは、と思いましたね。

S 私もそこが気になりました。この歌は一瞬の出来事を詠む唄目詠というのでしょうか。私は植物に疎いものですからよく解らないのですが、草の種と実は別なものですか。

T 種は実ですから同じものです。

I わざわざ違う言葉を使っているけど同じなんでしょう。「去る」という言葉が意味を持ちすぎると思うので、もう少し軽く飛んで行く、という風に詠むと良いと思う。それから「何の実ならん」は、この位置で良いのか、と思いました。

S 私は深読みかもしれませんが、作者は自分の人生に引きつけて「人生は一瞬」と、言いたいのかと思いました。

T この歌は、一首目の「目眩れば長い月日に悲惨あり照る日曇る日それも人生」に続いて詠まれているので、自分の人生を「草の種と実」に例えて詠んでいるようです。「種」は自分の人生そのものの、「実」は自分の子供とか経験してきたものを指しているように読み取れる。

Y そうすると、「去る」はこのままの方が良いですね。

T そうです。作者は思い返すと自分の人生も「一炊の夢」のような一瞬の間だったなあ、と詠んでいる。具象と抽象とが上手くミックスしているし、含蓄のある歌だと思っています。

司会 三首目は、渋谷支部の武田節子会員の

鮮烈な光一筋種に射し言の葉の茂り芽吹き初む心
 を取り上げます。どなたからでも如何でしょうか。

Y 難しい歌ですね。

S 心象詠ですね。「種」はご自分の脳だろうと思います。その脳が「鮮烈な光」を受け、刺激になって言の葉が茂ってきた、と言うことでしょう。おそらく作者の歌に対する歌心が蘇って来た、と言っているのだと思います。

I この歌は、葉っぱが茂って芽吹きが初まる、と詠んでいるので順序が違うのではないのか、と思いました。それと、結句に「心」という語句がぼつとでてくるので、一寸、読み切れない歌です。素材としては素晴らしいと思うけど、歌がゴツゴツしている感じで、もう少し洗練されてくれば良い歌になると思いましたね。

Y そうですね。少し順序を変えて、「鮮烈な光一筋種に射し言の葉芽吹き茂りてゆかん」と、すると分かり易いと私は勝手に思いました。

T この歌は基本的には自分を鼓舞する歌ですね。作者は摩周湖の朝の光をうけて自分の心を覗いたのでしょうか。「鮮烈な光一筋種に射し言の葉芽吹き初むを知る朝」としてみてもどうでしょう。「茂り」も「心」も取ります。作者としては「心」を結句にもってきているが、「心」とまで言わなくていいでしょう。光が射してきて歌心が芽生えてきた朝だ、とゆうふうにとめたほうが良いと思います。

司会 四首目は、千葉支部の森五貴雄会員の

秋深むかたちを見せて水引草つどいて朱し夕風冷ゆる

です。如何でしょうか。

I 私は「秋深むかたち」がわからないです。水引草はそういう形をみせるのかな、と思いました。

S 「秋深む」と結句の「夕風冷ゆる」との関係がどうかと

思いましたね。

Y 私は「かたちを見せて」というところに引っ掛かったので、「かたちを見せて」を取ってしまっ、「水引草つどいて朱く秋ふかむ夕風冷ゆる〇〇〇〇」として、結句には作者の住んでいる茂原の地名とか、川の名前とかを入れてみてはと思いますね。

T それも良いですね。

S この歌は、情緒的ではあるけれど単なる自然詠では無くて、一種の社会詠ではないかと思いました。今の不況の時代に企業もかたまっていれば色が見せられる、という意味で。

T それは深読みのしすぎでしょうか。

I 「つどいて朱し」はいいですね。

T そうですね。四句目までは良いと思いますよ。

S 「秋深むかたち」というのはどうでしょうか。

T 何何のかたち、というのはプロの歌人達がよく使っているの、それなりに雰囲気は持っていると思いますが、この歌の場合、結句に特異性がないと歌が平凡になってしまします。それから、旧仮名なので、「つどひて」に直します。

Y そうすると、この歌の結句は何が良いでしょうか。

T 水引草の花がいくつか実に変わっているとか、実をこぼしているとか、良く観察して「秋深むかたち」が読者にわかるように、もっときちんと詠む事が大切だと思います。

司会 本日は具象と抽象がうまくミックスした歌、ウィットのある歌、自らを鼓舞する歌などをとりあげることができました。これで終わります。有難うございました。

(記録 山田紀子)

選者 角田 順子

前向きに生きて来し夫よ下呂の湯にうからの祝ふ七十七歳

照山 好子

奥田屋の川音聞けばかなしきにふいに浮かびくふるさとの

川 富永 道子

夕闇の中にすっぱり函館の夜景は輝き静かに燃えて

永野 昌子

優雅なるこれは空木と細枝をバチンと折りて空ろ見する友

松本 啓子

清姫の墓に立ち寄り古道へと姫の化身かしる蛇に逢う

丸山孝一郎

子や孫の正月集ふをたのしみに一枚残るカレンダー見る

宮井 富美

小春日の庭に寄り合ひサワギキョウうつふんうつふん反り

花咲く 村田 孝子

灯心の糸の太きに炎たち灰か熱もつ朱なるあかり

石塚 立子

混み合ひし庭木のなかにうめもどき枝しなやかに空求めゆ

岩橋千代子

く 燃え盛る色極まりて裏悲しあとは散る身ぞ深山のもみじ

上田やい子

選者 土方 澄江

人生に二度目は無けれど終章に近づき見えなき何かが見え

くる 岡崎 くに

独りなりいろいろありて独りなりそのいろいろが脳なまきを去ら

ず 君塚 一雄

☆外出の予定なければ紅さしてブラウス赤く今日の始

まる 黒羽 紘子

余裕なき昭和の生活越え来して光と涙ふりそそぐ秋

空と海真赤に染めて沈みゆく日輪あるいは島の血の色 鈴木 薫子

住みし人さりげなく去りし住宅の木犀香り思ひ出散らす 高崎 邦彦

黙しつつ耕し地を這ひみのり採る秋の夫婦の影ながくあり 谷河 ひさ

身の幅に玄関あけて出入りするひとり暮らしの習慣長き 玉川 愛子

山の端を転がるといふ月の影尾花はみたり飛驒の名月 塚本 正子

華やぎの色に染まらぬ葉もありなむ渋み深まる日陰のもみ 二反田 實

じ 上田やい子

上田やい子

上田やい子

上田やい子

上田やい子

上田やい子

上田やい子

選者 酒向 一次

脚上げて祝ひ呉れるか活き海老の無慘は言はず米寿の祝膳
川村 貴美

白萩は舅への供華に秋海棠は姑への手向け彼岸中日

小林 絢子

迷ひつつ夫と買ひきし肉まんの熱きを分けて少し若やぐ

近藤 リイ

あの世へは意識を有ちて生き次ぐも肉体無き身は勝手も違

はむ
佐田 孝義

杳き日の唱歌は遠景老いて今もみぢの山の只中にあり

庄司 久恵

☆間引き菜をすすぐ真水に秋の陽の透きてゆれたり宙をうつ

して
末次 房江

兵の日を書きし自分史読む夫の脳しばしを甦りたるや

月田 藤枝

皆髪を染めゐて垂らし田植ゑする渋谷のギャルら「ノギャ

ル」と呼ばる
土橋 茂徳

ロゼが好きひと言君にいった夜乾杯しようとグラスが並ぶ

原武 寿子

いく重にも山は重なりほのかすみ紅葉ぬらして飛驒に雨降

る
山田田鶴子

選者 渡辺 幸子

☆外出の予定なけれど紅さしてブラウス赤く今日の始まる

黒羽 紘子

☆間引き菜をすすぐ真水に秋の陽の透きてゆれたり宙をうつ

して

末次 房江

刈田にはこぼれ啄む雀群の歓喜のさへづり秋天に満つ

杉山 榮子

「雪は降る」口遊みたり友待つ間はからずも雪降り出して

きぬ
高橋 和子

残菊を焚けば流れるうすけむり往く秋に手向けの庭納め

梶野 露

難病と闘い続けた年も暮れいにしえの人春待月という

堀井 英範

雷に胸くり抜かれなほ生きる社の神木しかと大地に

松岡 三夫

真夜更けていつしか雪止み銀世界真珠色の月煌々と照る

宮原喜美子

藤色のあけびは割れて白い実を透きとおらせて水彩画のご

と
村田 一江

夕焼けの雲を追ひかけ歌ひつつ小鳥は群れて埒に帰りぬ

森本 元昭

悲しさが水より透明に延びてゆく靴裏の釘増殖してる
歯ぎしりのような階級見送りの義理人情の寂しい眺め

原田 寛

口語短歌の旗手として私が最も囑目している歌人。巻頭二十五首詠はその集大成の一つ。「誘惑」と題して、作者は何を表現したかったのであろうか。抜芳歌に上げなかったが、「甘い死誘う」が二首、「甘い習性」が一首。どうやら作者の心を解くキーワードは、この「甘い」の言葉の中にあると思う。しかしながら、抜芳歌二首を含め、その世界はギリギリに自己を追いつ込んだ言葉の収斂の中にある。作者は十数年前、その作風を大きく変えた。その事について述べる紙面は無いが、それからの作者の歌には、ある意味鬼気迫るものがある。一度ゆっくりと原田寛論を書いて見たいと思う所以である。よく作者の歌は難解だと言う。しかし作者が歌っているのは、自分の周りの何気ない日常の一齣、決して特異な世界では無い。抜芳歌「悲しさが」の根底には日々の通勤の無味乾燥と虚しさの中で感じる足の重さが靴裏の釘の増殖になり、「歯ぎしり」は職場の情実人事とそれに群がる人間の姿を、自らを埒外に置いて眺めた悲しさ。作者の目は常識を枠に入れ、そこから食み出た真実を丹念に見詰める。その自虐は自らの心を傷付けてやまない。だからこそ真剣に安寧を求める。そしてその誘惑は墮落と死しかもたらさ

ない事を知っている。知っているからこそ、その誘惑は甘い。あるいはそれは人間誰もが持っている、ほとんどの人が陥っている甘い習性なのだ。人さばにここださやげど季にはふ神が貌なり巖立ての壁

奥田 清

「さばに」は「多い」、「ここだ」は「たいそう」、「さやげど」は「ざわめくけれども」、「にはふ」は「丹穂ふ」で「赤い色にくっきり色づくこと」。つまり、「人が沢山来てたいそうざわめいているけれども、秋になり木々が真赤に色づいた巖立の壁は神の貌として私に迫ってくる」と言うのである。故郷飛騨をこよなく愛し、その故郷に歌友を招いて吟じた作者の喜びと誇りに満ちた秀歌と言えよう。ヘルソナをそれぞれつけし夫婦^{めおと}居て互に取れば避けざる離婚

君塚 一雄

「ヘルソナ」とは「仮面」。最近仮面夫婦と言う言葉をよく聞く。誰でもが多かれ少なかれ仮面を付けて生きている。そんな男女が同居する結婚形態を守る為には、道徳や地域社会の掟を必要とする。その最たるものが「家」の概念であったが、今はそれが崩壊し、地域社会が崩壊した。だから離婚が急速に増加している。しかし、男女が共に住み子供を育てる大切さは不変のはず。私達歌人が見詰めて行かねばならぬ大切な世界でもあると、作者の悲しみの中で実感する。

野分立つ木の間に糸をめぐらせて日がな待つのみお女

前々号 (301 号) 秀歌拔芳

郎蜘蛛は

木村恵美子

「野分立つ」はこの場合、台風が吹くと言うのではなく、秋から初冬にかけて吹く強い風と受け取った方がよい。冷たい風の中糸を張って一日中獲物が掛かるのを唯待っているよ女郎蜘蛛はなあと言うのだ。待つ事しか出来ない宿命を背負った女の悲しさはあるいは作者は知っているのではあるまいか。だからこそ女郎蜘蛛は美女の妖怪として各地に語り伝えられているのであろう。

旅終えて弾む心を伝えたく、夫なきことの身に沁みる夜

黒羽 紘子

「伝えたく」は「伝えたい」にしたい。その旅はお伊勢参り。お伊勢参りは、江戸時代はほぼ日本全域で、数百万人規模のものが三回起こったと言う。お蔭参りとも呼ばれている。伊勢信仰は日本人に根強い。作者も一度は伊勢参拝をと願っていたと言う。それが叶い楽しい旅行が終った時に最も伝えたい夫がいない。その悲しみは喜びの大きさに比例して深い。作者は事有る度にこの悲しみと対峙して生きて行くのであろう。

素朴なるマウイマリンバナ太平洋鍵盤打楽器竹の音清

し 河野 静子

竹楽器は東南アジアに多いと言う。南太平洋諸島にも多い。日本にも笛や笙など古くから雅楽器に竹が用いられて来た。拔芳歌、マウイ島のマリ

ンバ、竹琴とでも訳せよう、その音色が清々しく美しい。まるで南太平洋の美しさそのままと言う。確かに南国の空に響く竹製の打楽器は単調ではあるがなぜか心打つ。私達日本人のルーツと深くかかわっているからであらうか。

夕べ来て子は目覚めねば思案せりビタミンビタミン心のビタミン

塩田 秋子

家に帰って来た子はすぐに眠ってしまった。まだ明るい夕方であった。ぐっすり眠った子。疲れている様子が一目で分かる。子の為に、好きなものを食べさせようと買物にベダルをこぐ。子を思う母の気持ちが一連の歌群の中からひしひしと伝わって来る。そんな中で拔芳歌の下句のリズムがとてめ軽快で、結句の「心のビタミン」が、子を救う力を一番持っているのは母だとの確信を秘めて力強い。

ゆるやかに流れ来たりし黄葉の群れ遅れしも見ゆ沈むもあらむ 庄司 久恵

その川は^{おおぼろ}大洞川、宿は奥田屋、飛驒の湯屋温泉街にある。太陽の舟短歌会で何度もお世話になった。作者はもう五回目。つまり太陽の舟短歌会では昨年の十月の吟行会が五回目と言う事になる。知り尽くした馴染みの旅館と風景。だからこそ作者はゆったりとした気持ちで川を眺め、ゆるやかに流れて来る黄葉の群を見る。そして、群れなが

ら決して一樣でない葉の定めを思う。それは人間にも相通う姿なのであった。

行列の首丈大きな大将は青き目をした遠き異国人^{ひと}

杉山 直子

「首丈」とは足元から首までの高さを言う。しかし大将首と言えば首より上、顔の部分と言う。だから拔芳歌の場合、背丈と言うより、首丈の方がぴったりとはまる。屈強で他を抜きん出た大男の姿が生き生きと浮かび上がる。言葉の力だ。しかし、箱根の大名行列に外国人が参加しているとは思わなかった。しかも大将で。それも良いではないか。作者の外国の若者に寄せる暖かい心が美しい。

身の幅に玄関あけて出入りするひとり暮らしの習慣長き

塚本 正子

ひとり暮らしの一つの形がそこにある。開き戸の玄関を全開にする必要も無い。いつしか身に付いた身の丈に合った生き方の具象、作者はそれを寂しいとも悲しいとも言っていない。唯淡々と事実を詠う。読者はその事実の前で自分を重ね、あるいは母を重ねる。そして歌は生命を吹き込まれる。しっかりと自分を見据えた作者の確かな目を感得する。

たおたおと紫陽花の花返り咲き秋景を圧す毬の艶めき

手塚 ミツエ

「たおたお」とは「たおやかなさま、しなやか

なさま」を言う。秋に返り咲いた紫陽花の表現として出色。秋は初夏の豊富な色彩とは異なり黄や赤が主流。単一な美しさと散りゆく美しさが魅力。そんな中で初夏の青や紫のしなやかで生気に満ちた色彩が異彩をはなつ。作者はそれを「毬の艶めき」と表現した。返り咲いた紫陽花は決して孤独ではなかった。私達も返り咲く力を失っていない。家横の街路樹一年見て過ぐる生あるものの変りゆくさま

宮井 富美

「この一とせ老いをつくづく感じとる八十三とはよく来しもがな」人間はある年齢になった時に急激に老いを感じる様だ。もちろん個人差はある。作者は今なのかもしれない。外出もままならぬ様になって来た時作者の前に街路樹があった。街路樹の多くは落葉樹。作者の変化を見続けた木もきつと落葉樹に違いない。芽生えそして葉を落して行く木に作者は自分を重ねたのであろう。木は又来年も芽を出す。作者も又春には芽生えることを切に願っている。

外つ国に暮らす孫らを慰めたし和菓子味噌しうゆトランク満たす

八代 陽子

アメリカからフランスへ渡る時、アメリカの港にあったコンテナが竜巻で消失。娘や孫は生活用品のほとんどを失ってフランスに住む。近くなら飛んで行きたいだろうに、唯々荷作りをして少し

前々号 (301 号) 秀歌拔芳

でも生活必需品を送ってやるしか方法は無い。世界は狭くなった。しかし日本人であることのアイデンティティーは消えるものではない。和菓子や味噌や醤油の中にアイデンティティーと母の愛情をひしひしと感じる。

晩秋の庭にかすかに紅残し百日紅の花まり萎む

山田 玲子

中国の伝説に恋人と百日後に逢う事を約束した乙女が、百日目の直前に他界、その死んだ日の後に咲いた花なので百日紅（ひやくじつこう）と呼んだとある。日本では小野小町と深草少将の逆伝説がある。又百日咲くからとも言われている。長く咲いて目を楽しませてくれた花もかすかに紅を残し花まりも萎んだ。去るものをしっかり見詰めいとおしむ心が美しい。

川魚皮から焼きて海は腹母の呪文の網に鰯おく

相羽 照代

作者を彷彿とさせる小気味良い語り口。母の言葉はいくつになっても忘れない。そんな母の言葉を持っている人は幸いだ。私は海で育った。しかし拔芳歌の様な言葉を知らない。ただ切り身の魚は全て身から焼く。それは私が魚の皮が好きだから。身をしっかりと焼いて皮をこんがり焼く。昔の人は生活の中から法則を見つけて賢く生きて来たのだとつくづく実感する。

従順に乗り居し成長特急を降りてはみたれど駅のカゲなし
生稲 進

上句は不況前の日本の労働状況と考える事が出来よう。唯従順に生きていけば自らの生活も成長を続けることが出来た。下句「駅」とは全ての出発点、終着点。自らの意志で生きる為駅を求めて降りて見ると、何一つ出発点や終着点が見つかからない。出口の無い閉塞感ばかりが支配する現代社会と、一度はまり込んだら抜けられない閉鎖社会の一面を鋭くえぐり出して見事。

自然とは輪廻転生の四季がある都会の姿は貼り絵のようだ
森田 勝昭

「輪廻転生」とは迷いの世界で何度も生まれ変わる事。三島由紀夫は「七生報告」と書いた鉢巻を締めて死んだ。自然の移り変わりは全て輪廻転生、四季はその形の一つとは奥の深い言葉。田舎の自然、そこに住む人間も含めてその摂理は曲げられない。しかし都会は違う。それは人工の世界、貼り絵の世界だと言う。年末風の強い夜、東京駅のビルの谷間から美しい満月を見た。しかしそれは貼り絵の様に確かに私にも見えた。

註

二月号に作者が森本元昭さんになって載りました。正しくは森田勝昭さんでしたので再度掲載します。作者には申し訳ありません。

作歌の目・作歌の技法(第六十二回)

作歌の技法(上級編)

三木 勝

短歌を作るにあたって、重要なことは、定型を遵守することと、もうひとつは、己の感動を読むこと。次に考えるべきことは、短歌における起承転結の構造を踏まえながら、感動を的確に表現することであった。定型を守ること、感動を的確に表現できる言葉を探すことが、短歌における基本的な技法であった。感動の核心を探すという作業は、己の心を旅することであった。作歌とは、自分の心を、自分で読むことである。このことによって、作歌は、作者に自分の心を旅させる。感動の核心へ到る旅は、語彙を探す旅である。語彙を探す旅は、心を描く道具を探す旅である。

自分の心象をあるいは感じた状態を的確に伝えられる状態になった時、歌は製品として外在化する。外在化した歌は、製品・作品として、現われる。作歌とは、歌を現わすことである。歌によって、心を読み、心を表わし、心を現わすことである。短歌は、人の心の感動を外在化する。作者亡き後も、外在化された感動は、この世に製品として、作品として存在し続ける。そしてその作品を読む者の心の内で、その感動はよみがえり、蘇生する。作品としての短歌において感動は凍結保存され、その作品を読み・聞く者によって、感動はその心の内で解冻され、その心の中でよみがえる。他者の心の中

でよみがえることのできる歌を私たちは名歌という。

他者の心の中でよみがえることのできる歌は、どのようにして可能であろうか。作歌とは、感動する主体・作者の心を掘り起こしていく旅である。短歌によって自分自身の心を掘り続けることによって、心の航跡が歌として外在化される。心の航跡の外在化によって、作者は、自己の心を対象化することが容易となる。心の対象化によって、作者は、自分の人間の進むべき道を考察するための素材を手に入れる。そこから人は、自分とは何か、人とは何かの考察の旅を歩み始める。

この考察の旅は、省みれば、個を超えて、自分のみならず、人とは何かという普遍的な問いであることに気付く。個の心を探求する個的行為は、個々の個の中にある心の構造を探ることである。個々人が、個の心を探求し、その結果を比べることによって、人の心の構造には、個を越えて、相互に共通項があることを発見する。

この共通項の発見は、人の心の有り様の普遍性の発見なのである。この普遍性の発見の手法は、西洋的ではなく、日本的である。西洋は、序論・本論・結論の論理構造により、自明を出発点として類推(アナロジー)を踏み重ねて、結論へと到る。しかし日本語文化圏の思考の基盤を形成している短歌的認識方法は、いま現在の瞬間における感性と認識を基盤として、短歌を読む。これは、いまの自明から次の自明へと歩んでその範囲内での結論を得る手法である。この手法によって、短歌的認識は、普遍性の発見へと到り、名歌を読む。

では、実際の作品から作歌の技法について考えてみよう。病みて聴く風の唸りは棄て切れぬおもひの丈を又もいたぶる

井上萬里子

作者はいま、「我が思念明瞭なれば脳梗塞には遠しと娘が我をはげます」の世界にいる。そして心の中は、『お手上げだ。』『よし頑張ろう。』裡にすむ二人の「已常に争ふ」である。「生きる意味分からぬと泣く吾が友を帰して後に吾も泣きたり」である。「うたかたの如き記憶の数々が脳裏かすめてひと日暮ゆく」のなかで、「湿りたる小鳥がひっそり夕暮れの窓に来てをり手紙のように」と歌う。どこからの、何の手紙のようなのであろうか。その小鳥を見ながら作者は歌う、「この世からリストラされるその日まで歌詠む心保ちてゆかむ」、そして「与えられないのちにあれば日々を大切に生き死は最後の未来」と人間存在の世界を読み取る。死は、私たち人間にとって「最後の未来」なのである。作者は、一生をかけてここに辿り着いた。そしてそれ故にこそ、いまある日々を「大切に生き」ることの大切さをひしひしと感じている。この歌を読む筆者も、生きている命を生きているうちに大切にしたいと、ひしひしと思わされる。

雨足を確かむテラスの水甕に降りみ降らずみ水輪の幽けき

志賀倭子

静かな歌であるが、作者の人生は静かではない。「風化する記憶の底に鮮明なソ連兵の狙撃に走りし砂浜」「終戦後ソ連兵に怯えし悲惨の日々脳裡離れず〈棄民〉の言葉」のように、終戦時の北朝鮮からの逃避行から人生のドラマが始まる。

逃避行は悲惨を極めた。母親が目の前で強姦され、その母親は直後に自殺した、そんな同級生もいた。その同級生は、一度も同窓会には出てこないという。南鮮に入っても、米軍兵による女子の〈徴発〉は続き、暴行は続いた。

そんな中、玄人女性が身代わりとなって、その場をしのいでくれたこともあったが、中には相談しあって、順番を決めていく状況も目撃したという。本人は母親の必死の配慮によってその難を逃れることができた。時には荷物となって母親が、その上に腰掛けて誤魔化し、難を逃れた。だからこそ「誰も持つ消したき過去をわが記憶も嘘をつくのか終戦記念日」と歌う。棄民されたこと、正義の戦争などないことを、作者は未来永劫に伝えたいのである。

「事故の怪我に運ばれし嫁病院の玄関に夫待ち頭撫で呉れし」と詠むように、帰国後は夫にも子にも子の配偶者にも恵まれ、幸せな生活であったが、「〈白血病〉と息子の病名知りし宵神楽椿は血を吐きて散る」となり、「永らへばかかる嘆きに身を置きて息子の病衣祈りつつあらふ」となる。孫ができ「孫のための自然体験唐黍の収穫われが子供に還る」と幸せな日々となるが「陰湿な苛め受けしを打ち明けて七歳の女孫堰切りて泣く」となる。しかし、作者は、「交響曲の器楽パートの演奏者個々は知らざる渾然のハーモニ」と歌う。ここにひとの人類の希望を見る。

私たちは、名歌を作る必要はない。真実に向かって生きていく姿勢の中から、自ずから名歌は生まれてくる。

文語で短歌を詠む人のために (十五)

奥田 清

〔五〕完了の助動詞

(6) つ・ね

(1) 完了 (た・てしまふ・てしまった)

はるかなる茜を追いて飛ぶときに雲は大地をなべて閉ざしつ (高安国也―北極飛行―)

咲き染むる合歡の花穂の仄明り薄き手紙の余白を読みぬ

(2) 強意 (きつと…。たしかに…)

君死なば吾は泣きなむしらじらと明け初む窓に寄り添ひて言ふ (私はきつと泣いてしまうだろう)

このたびの戦には、相違なく勝ちぬとおぼゆるぞ。(平家物語) (きつと勝つと)

活用の型は「つ」は、下二段型。「ぬ」は、ナ変型で、次のようである。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接統
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	用言の連用形に
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	副詞・形容詞の連用形に

※「臥しつまるびつ」・「浮きぬ沈みぬ」のように、「つ」「ぬ」が二つ重ねて用いられると並列の意味を表わす。

※「つ」・「ぬ」は、いずれも完了の助動詞であるが「つ」は、完了のしかたが急激なる意を表わし、「ぬ」は、完

了のしかたが緩慢なる意を表わすといわれる。

次は、宮冬二の二首である。「つ」「ぬ」を鑑賞してみてください。

・道ばたのおいらん草の種採るとしばしとどめつわが車椅子

・歳の夜の鐘段々と霜空にきこえてをりし楽しさ果てぬ

(7) たり・り

(1) 完了 (た・てしまった)

・言ひそびれ聞きそびれたる夢いくつマングロープの森に潮満つ

・輝ける流星一つ雲間よりわが胸奥の闇に消え墜つ

(2) 存続 (ている・てある)

・黄金に熟れたる麦の穂をもてるビーナスは射る夏至の太陽

・潜みもつ悪を闇間に放たむと月夜茸あをく発光をせり
活用形はナ変型である。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接統
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	動詞の連用形
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)	サ変の未然形 四段の已然形

「り」の接続は、サ変の未然形、四段の已然形である。

「サミシイ」り、と憶える。が、近年、四段の命令形接続説が出てきた。「サシミメ」である。「寂し女」は私は嫌いだ。「寂しい」でとどめておきたい。

歌会報告

本部歌会 創刊30周年・300号達成記念新年会（照山記）

日時 平成22年1月9日（土） 12時～18時

場所 ホテルはあといん乃木坂（健保会館）

出席 50名

平成22年の新年会は、創刊30周年・300号達成記念と銘打って行われた。歌会12時～新年宴会3時15分第1部は歌会で、50名出席で出詠59首。司会は原田同人で採った人2人、採らなかった人1人、そして高崎代表が評言。最後に作者弁で3時終了。互選の結果は

第1位 看取りする者のみの負とおもへざり病みゐるはなは
哀しかるべし 月田 藤枝

第2位 手付かずの未来わが手にたっぷりと乗せて新しき年
明けわたる 川村 貴美

第3位 「じゃまたね」と別れに交わすこの言葉曖昧なれど
心安らふ 岩橋千代子

上位3名に高崎代表から賞状と賞品が手渡される。

第2部 新年祝賀会は、記念写真撮影のあと、役員会を終えて3時30分開始。

原田事務局長が開会の辞のあと、高崎代表が創立30周年を閲し300号を達成したことを多とし、今後さらに発展を期したい、と力強い挨拶。今年度は、合同歌集を刊行したいと抱負を述べられた。続いて松岡編集長が、編集を担当して6年



務局の石塚立子さん、冨永道子さん、深谷幸子さん山名恒子さんらが読み上げられた。ともに心の籠ったお便りでした。

また歌会1位の月田藤枝さんの謝辞を籠めたご挨拶があり、宴のトップは高橋和子さんのシャンソンであった。続いてよしだゆきおさんの互選第一位の月田さんの歌の詠唱。北川昭さんの民謡。そして30年間太陽の舟を育てて来られた高崎代表への感謝状と記念品が、山名恒子事務局次長から贈呈された。感激した代表の目に涙が浮んでいました。

最後に「手のひらに太陽を」全員で合唱し、記念の新年会は予定どおり5時30分終了しました。

間250号から300号に到達できたのも会員諸氏のご協力あってこそと感謝され、本歌取りと盗作の違いについて述べられた。次いで、丸山同人が乾杯の音頭をとられ祝宴は始まった。秋田八郎潟支部長の土橋茂徳さん、水戸支部長の長須正文さん、伊豆支部長の佐田孝義さん、岐阜支部長の奥田清さんからの、30周年・300号達成記念祝賀会に寄せられたメッセージを事

渋谷支部／志賀 倭子 (丸山記)

日時 1月23日(土) 13時～17時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 丸山孝一郎

出席者 6名

昼食をとりながら懇談をした後、支部の会計報告が北川さんからなされ、今年度支部会費後半分は徴収しないことを決めた。その後会誌一月号の各自の七首についてみんなで勉強をした。他の人から色々な問題点や考え方を出され各自勉強になりました。

千葉支部 支部長／原田 寛 (八代記)

日時 12月26日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター3階

司会 森 五貴雄

出席 15名 出詠 19首

高崎先生より急逝された藤井武徳さんを悼み、一年を振り返るお話がありました。また、三〇〇号の出版を無事終えたことのお礼があり、感慨深いお話がありました。穏やかな年の瀬、久し振りに岡部さんも出席され、真剣なうちに、和やかな納会となりました。

・段取りのメモをみながら働けどちぐはぐだらけの老ろう二人 鈴木 熹子

働けど、老ろう二人 具体性がある方が良いという評

水戸支部 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 1月10日(日) 13時～15時

場所 びよんど(男女センター)

出席 17名 出詠 11首

司会 塩田 秋子

歌会の前に1時間はやく集まり新年会をした。昼食をとりながら親睦を深めた。ミニ講義は八代東村。行変えや、リズムなど新しい試みをした歌人です。歌会に入りそれぞれ個性のある歌に思わず惹き込まれ、実り多き会だった。

・色あせし紅葉が枝につながるを風はやさしく徐徐に散らすも 黒羽 絃子

水戸支部 支部長／長須 正文 (深谷記)

日時 1月17日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 4名 出詠 10首

司会 深谷 充代

新年早々の歌会は、皆都合がつかず4名で開催し、一首ずつ丁寧の評をし、充実感がありました。

・冬の月部屋の奥まで射し込みてへアピン一つ見つけてくれぬ 岩橋千代子

揭示板

吉報です。平成21年度NHK全国短歌大会において、深谷幸子さん(柏支部)の次の歌が栗木京子選に秀作として入りました。お喜び申し上げます。

・空みえぬ六本木駅地下深し大江戸線の現在地 かべ